

## 現状と課題（A欄）

## （現基本構想の進捗検証・評価）

## 【みどり・農】

下がっていた緑被率が2000年代に入ってどんどん戻ってきた。屋上緑化、民有地緑化に対する補助を頑張った結果である。

みどりの取組を積極的に推進しており良くやっている。緑被率も高まっている。

個人所有のみどりに対する補助制度はあるが、もう少し手厚い支援が必要ではないか。

農とのふれあう機会の充実はよくやっている。

みどりの基本計画において、各施策に繋がりをもって取組を進めていることは評価できる。

## （今後の社会環境や区民生活・意識の変化等の新たな視点）

## 【みどり】

近年激甚化する災害にあって、（倒木など）民有地のみどりを支えている人たちが困っている。

グリーンインフラは防災に、副次的にはコミュニティに役立つ。

路地裏に住民が花を植えることで空き巣が激減したという新聞記事を読んだ。美しさだけでなく、みどりの機能に防災等の安心なまちづくりという視点を取り入れたらどうか。

みどりの質の向上が必要。

## 【農地】

特定生産緑地制度により、長く営農できるようになったが担い手が少ない実態がある。農地の貸借制度もあるので、農地の減少幅は減っていくのではないか。

23区において、杉並は農福連携、都市農地に強みを持っている。位置づけを高めていく必要がある。

## 【その他】

総花的か、それともポイントを絞るか議論が必要ではないか。

## 目指すべきまちの姿（B欄）

## （目指すべきまちの姿）

①暮らしを支えるみどり（グリーンインフラ的視点）が身近にあふれるまち

②区内のみどり（公共財）を共有し、共に支え合い守りつないでいくまち

## （目指すべきまちの姿を設定した考え方など）

①

区民のために身近なみどりを大切にしていくことが大事。

みどりの量で評価しがちだが、今後は質の面（ランドスケープ、景観）を追求しステージを一段上げる必要がある。

質の向上を図ることが必要。生物多様性の視点も加える必要がある。

生物資源の保全と活用（地元食材の活用）により、農地の質を高めてる必要がある。

②

所有者・維持管理者と利用者が共に支え合っていくようなみどりのまちづくりの仕組みを作る視点が必要。

農地を公共財として捉え、関わっていくことが大事。

「目指すべきまちの姿」に進んでいくための 第1部会—資料32  
基本的な方向性など（C欄）

## （基本的な取組の方向性）

## （具体的な手段・方法、取組など）

## ①暮らしを支えるみどり（グリーンインフラ的視点）が身近にあふれるまち

区域を越えて、広域的な視点でグリーンインフラの整備を推進する。

みどりの質を高め、ストーリーやデザイン性をもって質を高める取組を推進する。

緑地は、災害時の被害抑制だけでなく、初動期には避難場所、応急期には応援部隊の拠点となる。受援計画等の策定を進める。

小規模なみどりへの支援を拡充する。

他区と連携し生物多様性、在来種の管理といった取組を推進する。

今後10年は区民が関与していくことを前提に区の支援を検討する。

市民農園のニーズは非常に高い。マンパワーの活用として、民間と農地の関わりを強化する。

生物資源の保全と活用（地元食材の活用）により、農地の質を高める。

SDGsを実現するための施策を構築する。

## ②区内のみどり（公共財）を共有し、共に支え合い守りつないでいくまち

民有地の樹木等、屋敷林を中心にサポートを強化する。

杉並のみどりについて、支援だけでなく、利活用する。

公共性を広く捉えた上で、私有財産に対して支援をしていく。

屋敷林の減少スピードを遅らせるための支援を拡充する。

屋敷林に対する理解を広げる情報発信を行い、サポートを強化する。

私有地のみどりを、杉並の公共財として一般化する体制を構築する。

杉並のみどりの7割が民有地である特徴を踏まえ、利活用を含めた自治体テリトリーの拡大を検討する。

グリーンインフラは、新しい事業を始めるだけでなく、既存の事業を見直して位置付ける。

農地の貸借制度を活用する。

宅地化が進む農地の生産緑地化。

農地転用の際の税制改正により宅地化に係る課題解決を図る方法を検討する。

荻窪において、荻外荘までの経路に緑化を進めていく等といったメッセージを区民に伝える。

SDGsの観点から捉え直した、みどりや農地のあり方を明確に示す。

（民有地のみどりに）公的補助を入れたものについて、利活用を検討する。